日向神話教材化の試み

―宮崎県小学校向け「海幸山幸伝説」テキスト作成について―

宮崎大学教育学研究科　永吉　寛行[i)]

要旨

小学校学習指導要領国語科における「神話」に関する指導事項や改訂教科書を検討の結果、宮崎県独自の神話教材として海幸山幸伝説が相応しいとの結論を得たが、引き続き教材条件に照らし合わせて検討した。その結果、神名について『古事記』『日本書紀』で相違がみられることや、小学校第２学年であることを考えると神名が長すぎることが明らかになり、そこで諸条件に鑑みて「海さち・山さち」が適当であるとの結論に至った。また概略を 17 の文で述べることで教材範囲を決定した後、物語の山場が、通常の物語教材のように中心人物の成長・変化の瞬間ではなく、他者からの言動によって中心人物の位置付けが変わる瞬間であることが判明した。教材の道徳性への配慮については、海幸の扱いについて注意を要する点を指摘した。また、学習活動については、通常考えられる活動に加えて「地域の特性」を取り入れる工夫を示した。

１．本稿の目的

拙稿[1)]において、小学校学習指導要領（国語）の指導事項や教科書（４種）等を検証した結果、宮崎県独自の神話教材開発の必要性に言及し、諸条件に鑑みてその教材として相応しい題材は海幸山幸伝説であると結論づけた。その際、小学校低学年において読み聞かせを目的とした教材条件として、①適当な分量（約 1,500 字）、②小学校２年生相当の言葉遣いや用字、③（我が国の言語文化らしい）独特の語り口調や言い回し、④起承転結や中心人物の成長などを取り入れた「ストーリー性」「完結性」、⑤道徳性、⑥学習活動の設定等を示している。本稿では紙幅の許す限り、これら６条件それぞれに合うよう、海幸山幸伝説を小学校２年生の国語教材としてリライトすることを目的としている。町田(2009)は、教材開発の際に最も重視する点として、「学習者の現実をとらえる」ことを挙げており、そこに「楽しく、力のつく」教材の必要性を訴えている[2)]。このことを念頭に置きつつ、小学校２年生が楽しみながら、学習指導要領の求める資質・能力が身に付くテキストを開発することが本研究の目的である。

２．『古事記』原典のストーリーから条件④及び⑤の検討

(1)神名について

海幸山幸伝説は言うまでもなく『古事記』『日本書紀』に収載されている神話である[3)]。海幸（兄）を『古事記』では火照命（ホデリノミコト）、『日本書紀』では火闌降命（ホノスソリノミコト）と表記し、山幸（弟）はそれぞれ火遠（袁）理命（ホオリノミコト）、彦火火出見命（ヒコホホデミノミコト）と表記しており、両出典において神名を別にしている。そこでまずは、教材の典拠として何を使用するのか、そして神々の名をどのように表記するのかの問題を解決しておきたい。

---

i) 宮崎大学教育学研究科

現在日本神話を国語教科書に収載しているのは、上記拙稿でも示したように、扱いの程度に差こそあれ、小学校では４種（全社）である。一方中学校では日本神話を収載した教科書を発行している社は１社も無い。高等学校になると[4)]、全10社発行分の「古典Ｂ」のうち、７社（１社はホームページ上からは確認できない）が「上代文学」という単元名の中で、『古事記』を取り上げている。従って、小学校から高等学校までの子どもたちの学びの繋がりという点を考慮すると、小学校段階においても『古事記』を取り上げる方が、生涯にわたって古典に親しむ態度の育成にも資するものと判断できよう。

また、神名についてであるが、小学校第２学年の児童の発達段階を考えると教材内に登場する人物名（固有名詞）は文字数（音数）も長すぎない方が抵抗感の減に繋がるはずである。例えば、神話にこだわることなく小学校国語教科書における物語教材について、その登場人物名を調べてみると、宮崎県内の小学校が採択しているＡ社、Ｂ社の２年生使用教科書の中で最も長い人物名は、Ａ社の「オオクニヌシ」の６字である。参考までに、「オオクニヌシ」が出てくる「いなばの白うさぎ」は付録の読み物教材としての位置付けである。そこで、いわゆる「正規教材」を調べたところ、最も長い人物名は、Ａ社Ｂ社共に掲載している「スイミー」（４字）であった。（ただし、Ａ社は２年生、Ｂ社は１年生である。）従って、ホデリノミコト、ホヲリノミコトでは両方とも７字では長過ぎる印象を与えてしまうことになる。仮に「ホデリ」「ホヲリ」と短縮したとしても、この２つでは音感が類似しており、聞いている児童に混乱を生じさせる恐れもある。そこで、本伝説のストーリー上の重要な要素は、棚田(2005)でも指摘されているように[5)]、『古事記』における海幸山幸伝説は「狩猟という生活の場面があらわれた部分」ということを考えると、狩猟と漁業という生活・労働イメージが濃く出ている「ウミサチ」「ヤマサチ」の呼称の方が相応しいと言えるだろう。その際、神話イメージが薄くなってしまうという懸念もあるだろうが、『古事記』原文においても

故、火照照命（かれ、ほでりのみこと）は、海佐知毘古（うみさちびこ）と為（し）て、鰭（はた）の広物（ひろもの）・鰭（はた）の狭物（さもの）を取り、火遠理命（ほをりのみこと）は、山佐知毘古（やまさちびこ）と為（し）て、毛（け）の麁物（あらもの）・毛（け）の柔物（にこもの）を取りき。

とあり、固有名詞ではないものの「ウミサチビコ」「ヤマサチビコ」として呼称していることから見ても、この名が見当外れということはない。そこで、本研究ではこの兄弟の名を「ウミサチ」「ヤマサチ」とする。なお、漢字「幸」は学年別漢字配当表では第３学年に配当されているので、読み聞かせ教材とはいえ、児童の目にするテキストには使用しないことが望ましいので平仮名表記とするが、「海」は第２学年、「山」は第１学年の配当漢字なので、テキスト上は「海さち」「山さち」としてよいであろう。

(2) ストーリーの範囲について

次に、ストーリーについて検討する。『古事記』における海幸山幸伝説の概略は次の通りである。なお便宜上、ホデリノミコトを「海幸」、ホヲリノミコトを「山幸」とする。なお囲み数字は稿者が以下に記した概略の文の通し番号であるが、これは後述のテキスト全体の構成を考えるときにこの番号を使用していくために符番したものである。

1 兄の海幸は漁業を営み、弟の山幸は狩猟をしていた。2 山幸が兄に道具の交換を願う。3 海幸は最初こそ拒否していたが最後には交換に応じる。4 しかし山幸は一匹も魚を釣ることが

できなかった上に、釣り針を海中になくしてしまう。5海幸が道具の返還を求めるも山幸は返すことができない。6海幸が何度も返せというので、山幸は自分の剣を折り砕いて 1500 の釣り針を作り、それを兄に返そうとしたが、海幸は元の釣り針を返すよう求めた。7山幸が困って泣いていたときにシオツチノカミが来て、小舟で海に漕ぎ出すように言う。8そのままワタツミノカミの宮殿まで行けるので、そこまで行けばワタツミノカミの娘が相談に乗ってくれると助言する。9言葉の通り宮殿に行った山幸はその娘・トヨタマビメと出会う。10トヨタマビメに招かれて宮殿に入った山幸は、ワタツミノカミにも気に入られ、トヨタマビメと結婚することになった。11そして３年が経った時に、山幸は当初の目的を思い出し、ワタツミノカミに兄の釣り針をなくしたことを相談する。12ワタツミノカミは海中の全部の魚を集めて、心当たりを質す。13その結果、鯛がその釣り針を飲み込んでいたことが判明した。14ワタツミノカミは山幸にその釣り針を渡すときに、呪文と海幸への対処法を授ける。15そしてその対処に必要な塩盈珠（しおみちのたま）と塩乾珠（しおひのたま）も授ける。16ワニに乗って海幸の元に戻った山幸はすべてワタツミノカミの言う通りにする。17海幸はとても困り、苦しむことになってしまったので、山幸に守護役（家来）になることを誓う。

以上が概略である。周知の通り、この後トヨタマビメの出産の話があり、見てはいけないという禁を犯す山幸の話になるのであるが、ここまで教材として含めてしまうと、起承転結の「結」がぶれてしまうことになる。見るな、開けるなの禁を犯すのは和洋問わず伝承文学の常套手段であり、イザナキ・イザナミ、浦島太郎、鶴女房など例を挙げればキリがない。そこには叙述を通して人の心の弱さの典型が読み取れることになり、その設定や発言の比較によって各作品に共通する文化的な側面が見えたり、あるいは相違点から各作品の特徴などが見えてきたり、という、いわゆる「言葉による見方・考え方を働かせる深い学び」に繋がる大変魅力的な学習活動に発展する可能性があるが、小学校２年生という段階を考えたときに、そこまで児童を指導することの困難さを考えると、トヨタマビメの出産の前でテキストは止めておくのが賢明な判断と思われる。

(3) 物語の「山場」について

以上、17 の文で概略をまとめたが、物語の山場はどこであろうか。小学校国語科教材、特に物語における読みでは「中心となる人物に焦点を当てながら、どのような事件が起き（事件の始まり）、どのように展開し、どこで大きく変化したか（クライマックス）を読み取ることが重要になる」[6] などの指摘もあり、山場の設定が教材開発の大きな鍵となろう。

上記概略をまずは次のように場面に分けてみる。

【一】事件の始まり→1～6
【二】助言者の登場とその助言に従っての行動→7・8
【三】海底宮殿における日々→9・10
【四】陸への帰還→11～15
【五】事件の結末→16・17

以上５場面に分割したが、中心人物である山幸が大きく変化したのはどの場面であろうか。この話を、「実直な弟が、意地悪と思われる兄との立場を逆転する話」と捉えるならば、やはり【四】ということになる。13までは出来事が説明されているだけで山幸に変化はなく、基本的

には 14・15 もワタツミノカミが山幸に助言と贈り物をしただけで、山幸の心情変化や成長ではない。しかし、この瞬間こそが最終場面での逆転劇に繋がるのであり、山幸の状況に変化が起きたのである。そもそもワタツミノカミはなぜ山幸に幸運をもたらそうとしたのか。それは、兄の意地の悪さに同情したこと、娘婿という身内の関係になったことなどが関係していよう。そしてそれは、山幸の実直さ、誠実さの結果とも言える。海幸の釣り針を無くしたことについて、自らの剣を壊してまで謝罪の気持ちを伝えようとしたこと、また、トヨタマビメをして「麗しき人」と形容せしめ、ワタツミノカミをして「天津日高（あまつひたか）の御子」を言わしめたその高貴さが、山幸自身を救ったのである。多くの場合、教科書の物語教材は中心人物自身が何らかの行動をし、何らかの精神的成長を遂げるが、この山幸の場合は、自らの行動や振る舞いによって他者の心を動かし、状況を好転させるストーリーが成立しうることになる。この、山場を考えてストーリー性、完結性を構築する教材開発の過程は、本稿１節で整理した条件⑤「道徳性」にも関与することにもなり、ややもすると、17 において山幸の兄への復讐劇と取られかねない傾向を補って余りある読みが期待される。また、注１の拙稿でも述べたように、宮崎県教育委員会の教材提供サイトにおいて、山幸が海幸に釣り針を返すところまでを描いた後、「この後どうなったのか、続きは自分で調べてみましょう」として、テキストとして明確に示すことを避けている点について、稿者は海幸の謝罪の心情を児童に考えさせることによって、児童に結末の納得感をもたらすと示唆したが、もう一つの選択肢として、あくまでも中心人物・山幸に視点を絞って様子に着目させて行動を想像させることで指導の決着を付けてもよいと思う。なぜなら学習指導要領の第１学年及び第２学年〔思考力、判断力、表現力等〕「Ｃ読むこと」の「指導事項エ」がそのようになっているからである。〔知識及び技能〕の指導については、「我が国の言語文化」の位置付けで神話の読み聞かせを通して親しみを持たせるという観点でよいが、〔思考力、判断力、表現力等〕〔学びに向かう力、人間性等〕の目標を設定する必要もあり、特に〔思考力、判断力、表現力等〕については最も相応しい指導事項を選ばなければならない。山幸の性格やワタツミノカミやトヨタマビメから見た山幸の様子を整理することで、山幸のその後の行動を捉えさせることが可能になれば、指導事項エを身に付けさせるのに相応しい教材になるのである。

(4)「道徳性」について

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説[7]には、第４章「指導計画の作成と内容の取扱い」における「第１章総則の第１の２の⑵に示す道徳教育の目標に基づき，道徳科などとの関連を考慮しながら，第３章特別の教科道徳の第２に示す内容について，国語科の特質に応じて適切な指導をすること」の部分の解説として、

> 国語で正確に理解したり適切に表現したりする資質・能力を育成する上で，日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高めることは，学校の教育活動全体で道徳教育を進めていくための基盤となるものである。また，思考力や想像力を養うこと及び言語感覚を豊かにすることは，道徳的心情や道徳的判断力を養う基本になる。さらに，我が国の言語文化に関わり，国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養うことは，伝統と文化を尊重し，それらを育んできた我が国と郷土を愛することなどにつながるものである。（下線稿者）

と、国語科と道徳教育の関連が示されている。下線部からも明らかであるように、これは国語科ではごく普通に育成する言語能力等が、結果的に道徳教育の基盤に繋がることを意識させるものであって、道徳教育の目的を強く意識させるものではない。むしろ、解説において上記の続きとして書かれている、「教材選定の観点として，第３の３(2)，道徳性の育成に資する項目を国語科の特質に応じて示している」の方が、本稿の目的である教材開発における道徳に関して、開発者として留意すべき事項になり得る。そこで「第３の３(2)」を確認しておきたい。

(2)教材は，次のような観点に配慮して取り上げること。
ア　国語に対する関心を高め，国語を尊重する態度を育てるのに役立つこと。
イ　伝え合う力，思考力や想像力及び言語感覚を養うのに役立つこと。
ウ　公正かつ適切に判断する能力や態度を育てるのに役立つこと。
エ　科学的，論理的に物事を捉え考察し，視野を広げるのに役立つこと。
オ　生活を明るくし，強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと。
カ　生命を尊重し，他人を思いやる心を育てるのに役立つこと。
キ　自然を愛し，美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと。
ク　我が国の伝統と文化に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと。
ケ　日本人としての自覚をもって国を愛し，国家，社会の発展を願う態度を育てるのに役立つこと。
コ　世界の風土や文化などを理解し，国際協調の精神を養うのに役立つこと。

先に述べたように、ア、イ、クなどは、国語科の指導事項に含まれる内容である。またウ、エは学習活動（あるいは言語活動）の設定に拠る部分が多い。さらには日本神話を教材とする場合に関連性がそれほど高くない観点もある。消去法というわけではないが、今回海幸山幸伝説を小学校２年生向けの教材として開発するに当たって、本文検討の中で留意したいのはオとカである。つまり「強く正しく生きる意志を育てる」ことや「他人を思いやる心を育てる」ことに繋がることが本文自体には配慮されなければならない。本教材を山幸の成功譚と位置づけるならば、その山幸の言動には強さと正しさが必要であり、他者を思いやる心を持たせる必要があるということになろう。兄弟で得意な道具を取り替えたいという好奇心が旺盛な点、兄の釣り針を紛失してしまったことを表すのに、自らの剣を壊してまで謝罪した点など、誠実で前向きな山幸の性格が印象づけられる。山幸が佩いていた剣は「十拳剣」と言い、同じ名の剣はアマテラス、イザナキ、スサノヲなど多くの神々との因縁が深く、ある意味呪術的な力を持つ剣でもある。その剣を壊してまでも謝罪の意を表した山幸という存在に、児童が共感を覚えるのは自然なことで、「なぜ山幸は幸運に恵まれたか」という問いにすぐに正解の感覚が脳に呼び起こされ、それを適切な言語化に結び付けるという活動につなげることは比較的容易であろう。

問題は、その山幸を許さずにある意味「ヒール」になってしまう海幸の存在を教材内でどうするかという点である。前述の棚田(2005)に詳しいが、この海幸を山幸が服従させる箇所ほか何カ所かは、「非教育的」という判断が働き掲載をカットしたこともあったという。だからいって、原典を歪曲するような形は「我が国の言語文化」に親しませることから主旨が外れよう。ここは、上記17において、「家来になる」を「謝罪する」というニュアンスで書き終えるのが

道徳性を持たせる教材としてはいいのではないかと判断している。あるいは、(それが行き過ぎであるならば、「家来になる」時と山幸に申し出た時の海幸の気持ちを児童に考えさせてもよかろう。) 塩盈珠と塩乾珠によって弟との農作物に出来に差を付けられた兄が、弟に服従を誓ったときの気持ちを考えさせることは、古事記作者がこのような筆致によって読者に伝えたかったことを考える機会にもなる。小学校４年の定番教材『ごんぎつね』において、最後の場面で「ごん」を撃ってしまう兵十の後悔の気持ちのイントロダクションとして、海幸の後悔の念を位置付けたい。

３. 学習活動について

日本神話の指導アイデアについては、学習指導要領の「読み聞かせを聞くなど」という指導事項を中心に様々な実践報告及び研究がなされてきた。大越他(2009)によれば[8)]、神話の読み聞かせを聞いた後、感想を発表し合うことのほかに、次のような学習活動が考えられるという。

・子どもたちによる読み聞かせ
・子どもたちによるストーリーテリング
・読んだ本の読書紹介をする
・「もしも、浦島太郎が亀を助けなかったら」のような「もしも」の話をつくる
・続き話をつくる
・紙芝居をつくる
・簡単な劇にして演じる

いずれも魅力的な学習活動である。神話を国語科の「読み物」教材の一つとしてとらえ、伝統的な言語文化に親しむだけでなく、これらの学習活動（言語活動）を通して〔思考力、判断力、表現力等〕の「C読むこと」の事項を身に付けさせることが意図されている。

しかしながら、本稿ではこれに加えて「地域の特性」を踏まえた学習活動の可能性を探っていきたい。例えば、教科書会社Ｂ社の２年生の教科書では、「いなばの白うさぎ」「やまたのおろち」のようなまとまった文章の教材は令和３年度教科書からは消えた。「言いつたえられているお話をしろう」という単元設定で、茨城県に伝わる「だいだらぼうの話」を掲載し、「いなばの白うさぎ」と「やまたのおろち」は囲み記事の形で、冒頭と思われる部分を各 50 字程度で載せているだけである。そして、その次のページに参考図書の紹介と共に、児童が居住している地域の伝説や神話を読み、興味のわいた部分を選び、音読する活動が提案されている。つまり、教師による読み聞かせという受動的な学習で始まり、終わるのではなく、読書、関心部分の選択、児童自身による音読という能動的学習が提案されていることになる。この点にまず注目したい。読書活動や探究学習への橋渡しを意図したと思われるこの視点は、学校現場の限られた時間や第３学年以降の学習への繋がり等を考えても意味が大きいと思われる。この点に、「地域の特性」を踏まえた学習活動考案の機会があると考えられるからである。

周知の通り、宮崎県内各地に日向神話が伝えられている。宮崎市神話・観光ガイドボランティア協議会(2012)の調査によれば、海幸山幸伝説だけでも県内に 22 箇所の関連する伝説伝承場所があるという[9)]。そこを、学校図書館ネットワーク等で結び、調べる、発表する、感想を伝え合う、自己の振り返りを行うまでの、学習活動提案システムが必要なのである。そしてその例示として、本稿で取り上げた海幸山幸伝説について、その 22 箇所の関連をまとめた資料を作成し、学習活動例も示して、第３学年以降の国語科学習や教科横断型の地域学習に国語科か

らのアプローチ等までを教材化していくことが理想であろう。

注・引用・参考文献

1) 永吉寛行「日向神話教材化への基礎調査―小学校第２学年『伝統的な言語文化』の指導イメージから―」『宮崎大学大学院教育学研究科教職大学院年報』1 号、2021 年 6 月、宮崎大学教育学研究科
2) 町田守弘『国語科の教材・授業開発論―魅力ある言語活動のイノベーション―』2009 年、東洋館出版社、pp45-46
3) 本稿では両作品の典拠として、山口佳紀・神野志隆光校注・訳『古事記』（新編日本古典文学全集１）1997 年、小学館、小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『日本書紀①』（新編日本古典文学全集２）1994 年、小学館を使用した。
4) 本稿執筆時（令和 4 年 2 月）では新課程の「古典探究」「文学国語」の教科書が管見に入らなかったので、やむを得ず旧課程（令和３年度以前の入学生）が履修する「古典Ａ」「古典Ｂ」の教科書について、各社ホームページ記載の目次より調査した。
5) 棚田真由美「『海幸山幸』の教材化に関する考察」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』108 号、2005 年、全国大学国語教育学会
6) 『小学校国語科「言葉による見方・考え方」を鍛える物語の「読み」の授業と教材研究』「読み」の授業研究会・関西サークル、2019 年、明治図書、p8 など。
7) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　国語編』2018 年、東洋館出版社、pp160-161
8) 大越和孝編『「昔話、神話・伝承」の指導アイデア 30 選』2009 年、東洋館出版社、pp. 20-22
9) 宮崎市神話・観光ガイドボランティア協議会編『ひむか神話伝説　全 212 話』2012 年、鉱脈社、pp144-152